

# ひとりから

真宗大谷派青少幼年センター機関紙 『ひとりから』  
発行日/2013年7月1日(年4回発行)  
発行所/真宗大谷派(東本願寺)青少幼年センター  
〒600-8168 京都市下京区室町通六条下る  
TEL: 075-354-3440 FAX: 075-351-9599  
E-mail: oyc@higashihonganji.or.jp  
発行人/青少幼年センター長 木越 渉



## ひとりからはじめる ひとりとであう

「子どものつどいin東本願寺」で配られた勤行本を手に

### 巻頭言

真宗大谷派青少幼年センター長 木越 渉 まごじわらる

「独生・独死・独去・独来」、「親鸞一人」、「独尊」と、仏教ではよく「ひとり」といふことばに出会います。

「ひとりぼっち」と聞けば、寂しい気持ちになります。この「ひとり」というところにおいて開かれた我が身の自覚もなしに、互いに手を繋ごうとしても、その繋いだ瞬間に新たな不和が生じることが、みんな経験してしまっています。「仲良しの会」は「仲良くない人たち」を作り出してしまっている内容も含まれています。

他を傷つけ、自分も傷つけている我が身「ひとり」を悲しみ痛むところから、仏、そして自らも深く願っている「つながりを生きる」という大地が開かれます。

この「ひとり」というところにおいて自覚された「痛み」をごきまで大切に、そこから広がる「つながり」を願って、青少幼年センター機関紙『ひとりから』を発行いたします。

### 蓮ちゃん通信 その① 巻頭写真募集中!

青少幼年センターでは、機関紙『ひとりから』の巻頭を飾って頂く「お寺にっどう子どもたち」の写真を募集します。皆さんのお寺での子どもたちの笑顔をお寄せ下さい。

宛先は、郵送または  
E-mail:  
oyc@higashihonganji.or.jp  
「『ひとりから』巻頭写真募集係」まで



# ともだち

高山教区

四衢亮

今から2500年前のインドのこ  
とです。アジャセとダイバ、ジーバ  
カという三人トリオはいつも一緒で  
した。アジャセは国の王子です。心  
やさしいアジャセは、みんなの人気  
者でした。おばあさんが重い荷物を  
持って困っていたら、荷物を持ってい  
ました。おじいさんが疲れて道端  
で座り込んでいたら、おぶって家に  
連れて行きました。国中の人が王子  
に期待していました。

ダイバは、アジャセに「さすが王  
子様、すばらしい。」とほめ、はやし  
たてアジャセの気を引きます。一  
方ジーバカはというと、いつもニコ  
ニコしながら黙々とアジャセの手伝  
いをするのでした。

ある日、ダイバが「たいへんです。  
たいへんです。」と走り込んでしま  
した。どうしたと尋ねるアジャセに、  
ダイバが言うには、「実は街で聞いて  
きたのですが、あなたのお父さんと  
ある国王とお母さんである后が、あ  
なたが生まれる時にあなたを殺そう  
としたのです。」「なんだと。」「  
あなたが生まれる前に、国王が占師  
を呼んで、あなたの将来を占わせた

ら、あなたが王を殺すだろうとい  
うのです。それを街の者は皆知って  
いるのです。」「

「なんとということだ。父と母が私を  
殺そうとした。その上国中のものが  
知っていて、私だけが知らないとは。  
皆うわべではおだてながら、心の中  
では親を殺すような奴だと思ってい  
たのか。」アジャセは、独りぼっちな  
自分が、皆の疑いの目で囲まれてい  
るのを感じました。その中に父であ  
る国王や母もいるのです。そしてと  
うとうと、ダイバの誘いに乗って家来  
に命じて、父の国王を牢に閉じ込め、  
その父を助けようとした母親も城に  
閉じ込めてしまいました。

やがて牢の中で、父の国王が亡く  
なりました。その知らせに牢に駆け  
つけたアジャセは、父の亡くなった  
姿を見た途端、後悔し始めました。  
ダイバの誘いに乗り、怒りにまかせ  
て行ったのですが、本当は父を愛し  
ていたのです。今まで自分を大切に  
育ててくれた両親との思い出が一挙  
にアジャセに蘇りました。

## 子どもたちと聞く法話

その日から、アジャセは重い病氣  
になりました。後悔の心が熱を呼び、  
体中から膿みが出てきます。その腐  
ったような臭いに誰も近づけないほ  
どです。そのアジャセの様子に、ダ  
イバはチツと舌打ちをしてどこかへ  
行ってしまいました。そばで懸命に  
看病したのは、閉じ込められていた  
お母さんとジーバカです。

熱にうなされてアジャセは、「ああ、  
私はたいへんなことをしてしまっ  
た。もう生きてはいられない。このまま  
地獄に落ちてしまつのか。恐ろしい。  
もういやだ。」と叫ぶが早い、短剣  
を手に握り自分の胸に突き立てよう  
としました。

「何をやるのです。」というが早いか、  
その短剣の刃をジーバカがぐっと挿  
みました。ジーバカの掌が切れて、  
血が流れました。

「ジーバカ何をやる。」と叫んでア  
ジャセははっと我にかえりました。  
「アジャセ様、あなたが地獄に落ちる  
なら私も一緒に落ちましょう。あな  
たの心が傷んでいるように、私の掌  
からも血が出ました。いいですかア  
ジャセ様、今度のことで苦しみ悲し  
いのはあなただけではいいのです。  
ご自分もあなたに殺されそうになり  
ながら、今必死にあなたを看病なさ  
っているお母さんのことを考えない  
のですか。国の人々もそうです。占

いなどに惑わされてほしくないから、  
あなたをアジャセー敵を生まない人  
と呼んで、愛してきたのですよ。こ  
んなことをしたら、さらに多くの人  
が傷つくでしょう。それに国の行く  
末はどうなるのですか。今のあなた  
は自分勝手です。」「ああ、ジーバカ。  
私は本当に愚かだった。いつも私の  
そばにいてほしい。」「もちろんです。  
私は以前のやさしいあなたにもどっ  
てくだされば嬉しいのです。」「



### むすび

親友とは何でしょうか。仲良く遊  
び、おもしろおかしく楽しみを分か  
ち合うだけが親友ではありません。  
苦しみや悲しみを共にし、最後まで  
支え合えるのが親友なのでしょ。う。  
そうした出会いがあるから、苦しく  
ても悲しくても人生はすばらしいの  
ではないでしょうか。

(出典は『涅槃経』による)





# 新聞紙フリスビー

簡単にできてしかも、よく飛ぶフリスビー。  
本堂の中でも、外でも危なくありません。子どもたちはとても喜びます。

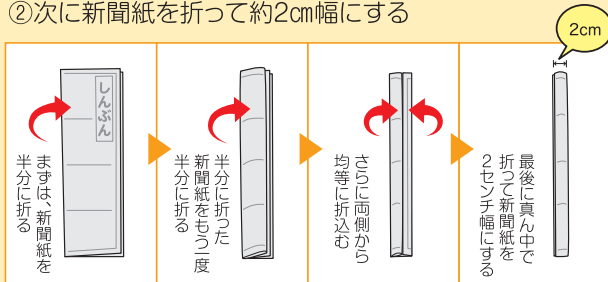
ひとりからはじめる  
イベントレシビ



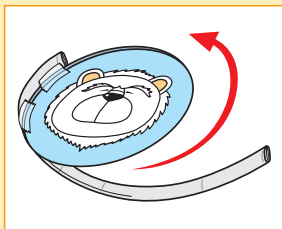
**用意するもの** 新聞紙1枚、セロテープ、ハサミ、コンパス、カレンダー程度の厚さのある厚紙

## 作り方

- ①厚紙に直径17cmの円をコンパスで書き切り抜く
- ②次に新聞紙を折って約2cm幅にする



- ③その新聞紙をセロテープで広がらないように端からとめていきます
- ④次に①で作った丸い厚紙の周囲に少しずつ新聞紙を貼っていきます



## 遊び方

- 厚紙にクレパスやマジックで絵や色を付けると自分だけの物ができてうれしい
- 対面してキャッチボールのように投げあうのもいいでしょう
- 飛ぶ距離を競争するのもいいですね
- 傘を広げて10メートルくらい離れたところから入れる、ゲーム形式
- ちょっとコントロールがしづらいため空き缶とかにあてるゲームは難しいかな？



詳しい作り方は  
青少幼年センターの  
ホームページ内  
「楽しくあそぶ」を  
ご覧ください。



## 特集

4月5日(金)  
**3.子どものつどい**  
in 東本願寺  
—東日本大震災復興支援—  
を開催

新しいはじまりの日

二〇一三年四月五日、本山にたくさんの子どもたちが集まって「子どものつどいin東本願寺」が開催された。

教団の青少幼年教化においては、「御遠忌などの大法要に向けて盛り上がりを見せるが、その後の活動は下降線をたどる」という歴史が繰り返されてきた。いつの時代にも現場で地道に取り組んできた人たちが存在することは承知しているけれど、教団の趨勢として、残念ながら否定できない事実であった。

二〇一一年、宗祖七百五十回「子ども御遠忌」を開催するため、全国の若手スタッフが準備に奔走していた三月十一日、東日本大震災が発生した。彼らの多くは自主的に被災地に向き、支援活動に取り組んだ。五月四日、そんな彼らのエネルギーが結集して開催された「子ども御遠忌」は被災者支援が大きなテーマとなった。

そして御遠忌が終わっても、彼らの活動は終わらなかった。被災地の状況が、彼らに「下降線をたどる」ことを

許さなかったのかもしれない。彼らは「教団の意向」というようなものとはある意味無関係に、SNS(ソーシャル・ネットワーク)を駆使して自主的に繋がりが続けた。「被災者支援を続けたい、子どもたちと関わり続けたい」という彼らの熱意が、今回の「子どものつどい」を開催させたと言ってもいいだろう。

言うまでもなく、これで終わりではない。被災者支援も教団の青少幼年教化も、四月五日という日が「新しいはじまりの日」であって欲しい。全国の若い人たちの活動を青少幼年センターがバックアップしていけたらと思う。彼らが生み出し育んでくれたこのムーブメントが今後とも脈々と続いていくことを願う。

「どうするべきなのか、こたえはすぐに出来ないけれど、声を聞き続け、手をつなぎ合っていきたいと思います。」今回の「宣誓文」のこの言葉が、いつまでも響き続けてくれることだろう。

さあ、踏み出そう。

(Y・I)



# マサコのちょこっとインタビュー



さがえ なつ ぶみ  
佐賀枝 夏文

1948年生まれ。大谷大学修士課程修了。児童福祉施設等での児童指導員、心理判定員を経て、現在は大谷大学文学部教授で大谷幼稚園長を兼務。カウンセラーネーム「サガエさん」です。



マサコ

機関紙『ひとりから』の編集長をつとめる。青少年センタースタッフでもある。

るとね、思春期を過ぎてから「おとな」になるほどに生き方が窮屈になっていくんだということが気になったんです。そのことを深刻な問題として、ぼく自身が抱えていたんです。だからでしょうか、今のぼくのテーマである「自縛からのココロの解放」につながったんです。そうなんです…、「子ども」が教えてくれようとしていることがつながったんです。

**マサコ** サガエさんは幼稚園の園長先生でもありますよね、それと関係しますか？

## 導かれ気づくべきは「おとな」…

**サガエさん** そうそう、「おとな」と「子ども」の境について考えていたときに、幼稚園に赴任したのです。そこであるエピソードに出会ったんです…雨が降ってできた水たまりに石を投げて子どもがいたんです。周りから石をとってきては、ポトツ、ポトツ…それを見ながら、サガエさんはその子どもが石を投げる「理由」を探しているわけです。何かに石が命中したら嬉しいんやろうか？とか、水の輪ができるのを見てるんやろうか？(笑)

そこで…、はたと気がついたんです。「子ども」は投げるだけで面白いんだって。「無為」なのですね。「おとな」と「子ども」

と分けたときに「無為」に生きられるのが「子ども」で、「おとな」はいつも「有為」がなければならない生き方をしてしまうって気がついたんです。「おとな」が「早くしなさい」「ちゃんとしなさい」と「有為」で導こうとしますが、ゴールは「窮屈」ではないですか、マサコさん。

だから…、「おとな」が失ったものが「いまここ」を生きることだとすると、導かれるべきは「おとな」ではないかと気づかされたんです。

**マサコ** わたしは「意味があることをする」とか、「何かの役に立つことをする」のが「おとな」のしるしで、そうすることが一人前の「おとな」なんだと考えていました。

**サガエさん** 「子ども」は「有為」にとられることなく、「いまここ」を生きる姿を教えてくれる菩薩さまかもしれませんね。

**マサコ** 「子ども」が時間を忘れて夢中で遊べるのは、遊びに意味を求めていないからなんですね。私はいつも時計とにらめっこしているような気がします。

今日は、ありがとうございました。

今回は、大谷幼稚園長で自称「サガエさん」に、「おとな」と「子ども」についてインタビューをしました。

## 「おとな」と「子ども」って

**マサコ** わたしたちはいろいろな場面で「おとな」と「子ども」を分けていますが、「おとな」と「子ども」の境って何が基準なのですか？

**サガエさん** そうですね…、学問的には発達によって分類されることもあるけど、ぼくはもっと素朴に「おとな」と「子ども」をどうして分けるのかって考えました。人間を、どうして「おとな」と「子ども」って分けるのか不思議だったんです。マサコさん、「おとな」と「子ども」の境目ってどう考えますか？

**マサコ** 「思春期」ですかね？

**サガエさん** そうそう、「思春期」という時期ですね。あるとき…、「思春期」前後で、何が変わるのかって考えたんです。そうす

青少年センターでは、メール相談窓口を開設しております！

子どもたちの悩みごとにサガエさんがお返事します。

sagaesan@higashihonganji.or.jp

(上記のアドレスから返信しますので、受信拒否設定にご注意ください)

## 蓮ちゃん通信 その②

### 夏休みには、子どもたちと一緒に東本願寺へ！

7月末から8月下旬にかけて、「同朋ジュニア大会」や「真宗本願寺子ども奉仕団」、「真宗本願寺中学生・高校生奉仕団」が開催されます。是非、お誘いあわせの上ご参加下さい！  
※詳しくは、「真宗」もしくはホームページをご覧ください。

予告

2013年11月23日、「子ども報恩講のつどい」開催！

※詳しくは、決定次第「真宗」ならびにホームページにてお知らせします。



◎さあ、青少年センター機関紙の発行です！既にお寺で子ども会を開いておられる方は勿論、「これからお寺で子ども会をはじめてみようかな」と思っておられる方にもご利用いただける、実際に役立つ情報を発信していきます。次号は十月一日発行予定です。皆様からのご意見・ご感想をお寄せ頂ければ幸いです。(青七主幹)

◎青少年センターが準備室の頃から願われてきた機関紙がついに誕生しました。紙面づくりを通じて、皆様とともに「子ども会」という、であいの場と時間をねんごろに歩んでいきたいと思えます。現場に立つ皆様の声を、ぜひお聞かせください。(編集長)

編集後記

